

全中道研会報

令和4年10月8日 No.2

全日本中学校道徳教育研究会

<https://zencyudo.webnode.jp>



会長挨拶

令和4年度

道徳教育推進教師育成講座
を終えて



令和4年度 全日本中学校道徳教育研究会

会長 月田 行俊

新型コロナウイルスは、7月に入り感染が再拡大し、「第7波」を迎えた7月14日には、累計感染者数が1,000万人を超えました。その後も新規感染者数は増え続け11日には国内の累計感染者数が、1,500万人を上回りました。また、WHOは、8月1日から7日までの1週間に、世界全体で報告された新型コロナウイルスの新規感染者数は約698万人で、このうち、日本は149万6,968人と、前の週と比べ9%増え、3週連続で、世界で最も多くなったと発表しています。この間、日本各地で大雨などによる水害も発生し、被害に遭われた方もおられるのではないかと思います、心痛いかばかりかとお察しします。

さて、昨年度はオンラインで実施した、道徳教育推進教師育成講座を、令和4年度は参加+オンラインで行うハイブリッド型研修という形で行うことができました。

本講座を受講された皆様、受講者を推薦していただきました理事、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

今回の講座は、昨年度に引き続き、文部科学省 飯塚教科調査官には研修A「講演」で「『考え、議論する道徳科の授業』の充実に向けて」と題してご指導いただきました。

この講義内容を踏まえ、「海と空―檣野の人々―」（文部科学省教材）について多様な

指導法の在り方について議論をしました。

今年度工夫した点は、受講者が作成した指導案を協議するグループのメンバーが事前に共有することで、研修B「演習」の際、各受講者が作成した指導案について意見交換をスムーズに行えるようにしました。

研修CD「演習」では、グループ内での指導案作成に向けて検討を行いました。「おもいやり」「生命尊重」「公正公平」「国際貢献」などで受講生が作成したものから、議論を重ねてグループの指導案づくりに取り組みました。この2日間にわたるグループ協議、それもひとつの教材に時間をかけて、教材の特質を踏まえ、主題、中心的な発問について考え、議論する機会は、短時間で行う研修ではできない取組です。そういった意味では、腰を据えてじっくり検討することのできる、この道徳教育推進教師育成講座の果たす役割があると考えます。

研修E「グループ発表」では、6グループが考えた指導案について、どのような協議を経て作成したかを中心に、発表していただきました。研修F「指導・講評」では、改めて「指導案の作り方」について、江戸川区教育委員会学校教育支援センター 坂口先生からお話しをいただき、研修G「指導・講評」では、グループ発表の総括として麗澤大学 鈴木特任教授よりご指導いただきました。

困難だと考える環境であっても互いに知恵を出し合いながら進め、受講者をはじめ、関係者の多くが先を見た前向きな取組に満足することができた有意義な講座であったと思います。前向きに取り組んでいた受講生そして、それを支えていただいた3人の先生方に心より感謝申し上げます。

道徳教育推進教師育成講座

今年度は、令和4年8月6日（土）、7日（日）の2日間にわたり、参集とオンラインを組み合わせたハイブリッド型の研修を実施しました。

1日目（8月6日）

研修A 講演

「考え、議論する道徳科の授業」の

充実に向けて

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

飯塚 秀彦 先生

1 道徳教育の要としての道徳科

令和3年度 道徳教育実施状況調査における設問「道徳教育を推進する上での課題は何ですか」の結果とともに考える。

○「学校の道徳教育の重点や推進すべき方向について教師間での共通理解や連携を図るための機会の確保」について

道徳教育を推進する上での課題として最も多くの学校が選択した内容である。

教師間で共通理解や連携を図る内容は次の4つ。

- ☐道徳教育で育成をめざす生徒像
- ☐重点とする内容項目
- ☐生徒の実態・課題の把握
- ☐道徳教育の指導方針

これらは各校の道徳教育の軸になる部分に関連している。

- ①学校教育目標から、道徳教育の重点目標すなわち道徳教育で育成を目指す具体的な生徒の姿を設定する。
- ②設定した姿を視点として生徒の実態（授業、行事、休み時間や放課後、部活動、家庭等での具体的な姿）を把握する。
- ③②をもとに重点内容項目を選択する。
- ④道徳教育の指導方針を決定する。

重要なのは、上記の□4点についての完成版を共有するのではなく、①～④のプロセスを共有するということ。例えば職員会議などの機会をプロセスの共有の場とし、全体で説明しながら進め、評価し、改善につなげていくことで、教師が納得感をもって推進することができる。

○「各教科等における道徳教育の実施」について

各教科等における指導の基本方針

「各教科等は、各教科等の目標に基づいてそれぞれに固有の指導を充実させる過程で、道徳性が育まれることを考え、見通しをもって指導することが重要である。」

（『中学校学習指導要領解説 総則編』第3章第6の1(3)各教科等における指導の基本方針）

各教科等の目標に基づく固有の指導において育まれる「学びに向かう力・人間性等」は、道徳教育・道徳科で育てることを目指す「道徳性」につながる。

各教科の指導を通じて生徒の道徳性を養うためには、教師の用いる言葉、生徒への接し方、授業に望む姿勢や熱意といった教師の態度や行動による感化とともに、次の二つの視点が挙げられる。

①道徳教育と各教科の目標、内容及び教材との関わり

各教科等の目標や内容に含まれる、生徒の道徳性を養うことに関わりの深い事柄の道徳的価値を意識しながら、学校独自の重点内容項目を踏まえて指導することにより、道徳教育の効果も一層高めることができる。その際、内容項目は詰め込みすぎず、重点内容項目に力点を置くことが大切である。

②学習活動や学習態度への配慮

生徒が学習に興味・関心をもち、積極的に取り組む工夫をすることや、相互に学び合う思いやりのある協力的な雰囲気や人間

関係をつくるように配慮することは、主体的・対話的で深い学びを実現することでもあり、学習効果を高めるとともに、望ましい道徳性を養うことにつながる。

学校教育の様々な場面において行われる具体的な道徳的習慣や道徳的行為についての指導の際、最終的なねらいとしているのは、指導を通じてその意義を理解し、自らの判断により、進んで適切な実践ができる資質・能力を育てることである。

○自校の道徳科が「道徳教育の要」となっているか。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要としての道徳科

「学校が教育活動全体を通じて行う道徳教育の指導の充実が、道徳科の指導の充実につながることを意味を深く理解し、道徳科ではその要としての重要な役割を意識して、計画的・発展的な指導を行うようにしなければならない。」

(『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』第4章第3節の2(2))

よく見られる実践として、行事の前に事前指導的に道徳科の授業を行うということがあるが、「要としての道徳科」という点から十分検討する必要がある。各教科、総合的な学習及び特別活動にはそれぞれの特徴や特有のねらいがある中で、生徒は、道徳的な意味などについて必ずしもじっくりと考え、深めることができているとは限らない。

道徳科の指導では、こうしたことを踏まえ、指導をより一層深めること(深化)等に留意することが大切である。

また、特別活動は、実践的な活動の中で、成すことによって学ぶ場や機会でもあり、道徳科では、特別活動で経験した道徳的な行為や実践について考え、感じたことを取り上げていくようにする。道徳科においては、各教科等の授業や行事等における体験活動、家庭や地域の中で、様々に揺れ

る生徒の心の動きを踏まえ、補充・深化・統合する指導を行う。その学びが特別活動等の具体的な場で生かされ、実践や体験につながっていくという点で要の役割を果たしているのである。



2 道徳科の授業の充実のために

令和3年度 道徳教育実施状況調査における設問「道徳の『特別の教科』化を受けた変化」への回答として「児童生徒による話し合いや議論が活発になった」に「とてもそう思う」「どちらかというと思う」と答えた学校は、85.4%であった。

○道徳科の特質を生かした学習指導

- ・話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導
- ・物事を多面的・多角的に考えるための指導
- ・道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導

道徳科の特質は、生徒一人一人の内面的資質としての道徳性を主体的に養っていく時間であるということ。

生徒が「考えることは面倒くさいけれども、自分の中のもやもやと向き合って考え、議論することはおもしろい。」と感じるような授業をすることが重要である。生徒が道徳的価値やそれらに関わる諸事象について自律的に思考する中で深い理解、深い考えとなっていくことを重視し、指導していく。

発問は、指導の意図に基づいて的確になされることが重要である。また生徒の発言を傾聴して受け止め、発問に対する生徒の

発言などの反応をなるべくたくさん書き留める等し、適切に指導に生かすことも重要である。

教師は生徒と共に考え、悩み、感動を共有していくという姿勢で授業に臨み、生徒が自ら課題に取り組み、考え、よりよく生きるための基礎となる道徳性を養うことができるように配慮することが必要である。生徒と共に人間の弱さを見つめ合い、考え合った上で、夢や希望などを共に語り合うような姿勢をもつことを大切にする。

○多様な方法を取り入れた学習指導

①問題解決的な学習を取り入れた指導

問題解決的な学習とは、生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳的な問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し実行し、よりよく生きていくための資質・能力を養う学習である。問題や課題は、道徳的な判断や心情、意欲に誤りがあったり、複数の道徳的価値が衝突したりするために生じるものであるから、教師がそれらの問題をしっかり理解した上で、教師と生徒、生徒相互の話し合いが十分に行われるよう、発問の仕方を工夫することが重要である。

【教師の主な発問例】

- ①ここでは、何が問題になっていますか。
- ②何と何で迷っていますか。
- ③なぜ、■■（道徳的諸価値）は大切なのでしょうか。
- ④どうすれば■■（道徳的諸価値）が実現できるのでしょうか。
- ⑤同じ場面に会ったら自分ならどう行動するでしょう。
- ⑥なぜ、自分はそのように行動するのでしょうか。
- ⑦よりよい解決方法にはどのようなものが考えられるでしょう。

（道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「『特別の教科道徳』の指導方法・評価等

について（報告）」別紙1「道徳科における質の高い多様な指導方法について（イメージ）」）

問題解決的な学習では、生徒一人一人が道徳上の課題に対する答えを導き出すことが大切であり、自分の気持ちや考えを発表するだけでなく、時間を確保してじっくりと自己を見つめ直して書くことなども有効である。

②道徳的行為に関する体験的な学習を取り入れた指導

道徳的価値を体験的な学習を取り入れた指導の中で理解するためには、道徳的行為をすることの難しさとその理由を考えさせ、弱さを克服することの大切さを自覚させることや、道徳的行為の難しさについて語り合ったり、見聞きしたすばらしい道徳的行為を出し合ったりして考えを深める学習が考えられる。また、読み物教材等を活用した役割演技などの疑似体験的な表現活動を取り入れた学習も考えられる。

これらの体験的行為や活動を通じて学んだ内容から、生徒が道徳的価値の意義などについて考えを深めるようにすることが重要である。この場合の体験は手段であり、体験自体を目的化しないように注意しなければならない。

○道徳科の評価の工夫

令和3年度 道徳教育実施状況調査における設問「道徳の『特別の教科』化を受けた変化」への回答として「評価することで、児童生徒の成長が把握でき、指導の効果が実感できるようになった」に「とてもそう思う」「どちらかというと思う」と答えた学校は、82.4%であった。

学習における評価とは、ワークシート等を用いた学習履歴、自己評価や相互評価を

もとに、生徒が自らの成長を実感し、意欲の向上につながるものであることが重要である。

年に数回、教師が交代で学年の全学級を回って道徳の授業を行うといった取組（ローテーション授業）も効果的である。何度も同じ教材で授業を行うことにより指導力の向上につながるという指導面からの利点とともに、学級担任が自分の学級の授業を（T2として）参観することが可能となり、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子をより多面的・多角的に把握することができるといった改善の観点からも有効である。また、道徳科の評価の妥当性や信頼性の担保にもつながると考えられる。

研修B 演習

「海と空―樫野の人々―」（文部科学省教材）を共通の教材とし、多様な指導法の在り方を考えながら各自が作成した学習指導案について、6グループ（4～5名で構成）に分かれて意見交換を行いました。

研修C 演習

研修Bでの意見交換の内容を踏まえ、グループごとの学習指導案を作成するため、協議を行いました。時間内に終わらなかった部分は、2日目の研修Dにおいて引き続き議論を続けました。



2日目（8月7日）

研修D 演習

1日目の研修C（グループ内での学習指導案作成）の続きを行い、学習指導案を完成させました。

研修E グループ発表－1（前半）

グループ1、グループ2が学習指導案を発表しました。

【グループ1】

<主題名>

人間愛に基づく国際人としての態度

〔C（18）国際理解、国際貢献〕

関連内容項目〔B（6）思いやり、感謝〕

<ねらい>

どの国の人々も同じ人間として尊重する人間愛の精神に基づき、国際人として共生していこうとする道徳的实践意欲と態度を育てる。

<中心的な発問>

あらゆる人が共生する国際社会を実現するために大切な態度とは？

【グループ2】

<主題名>

国を超えて助け合う

〔C（18）国際理解、国際貢献〕

<ねらい>

エルトゥールル号遭難事件でトルコ人を救った樫野の人々の思いや、イランイラク戦争で救援機を飛ばしたトルコの思いを通して、国という枠を超え、同じ人間として愛をもって助け合おうとする心情を育てる。

<中心的な発問>

イランイラク戦争の時、トルコの人はどうして日本人を助けたのだろう。

樫野の人は、トルコの人をどんな思い出助けたのだろう。

研修F グループ発表－2（後半）

グループ3～グループ6が学習指導案を発表しました

【グループ3】

<主題名>

命のつながり〔D（19）生命の尊さ〕

<ねらい>

一見関係がないように見えても、命のつながりがあることを自覚し、互いに支え合って生き、生かされていることに感謝しようとする道徳的实践意欲と態度を育てる。

＜中心的な発問＞

助けられた人々は、どんな思いで生きてきただろう。

【グループ4】

＜主題名＞

おもいやり、感謝

〔B(6) 思いやり、感謝〕

＜ねらい＞

人間は、善の連鎖（善意と思いやり）によって支えられ、守られていることに気づき、それに感謝しようとする態度を育てる。

＜中心的な発問＞

樫野の人々の、人を助けたいと思う気持ちとはどんなところから生まれたのだろう。

【グループ5】

＜主題名＞

真の国際平和とは

〔C(18) 国際理解、国際貢献〕

＊真の国際平和：国関係なくお互いを尊重し、お互いに助け合えること。

＜ねらい＞

どの国の人も同じ人間として尊重し、お互いのことを思いやり助け合いながら、人類の発展に寄与しようとする道徳的实践意欲を育む。

＜中心的な発問＞

なぜ樫野の人々は、ありったけの食糧を提供してまでトルコの人を助けたのでしょうか。

【グループ6】

＜主題名＞

国際貢献（国と国の信頼をつくるもの）

〔C(18) 国際理解、国際貢献〕

＜ねらい＞

樫野の人の献身的な救出活動を通して生まれた信頼が、イランイラク戦時下の日本人の救出とつながったことを理解し、国と国とが信頼関係を構築したことにより多くの人命が救われたことを通して、国際的な視野に立って世界の平和に寄与しようとする道徳的心情を育む。

＜中心的な発問＞

トルコ人よりも優先して日本人を助けたトルコの人々の内にある、日本に対する思いにはどのようなものがあるでしょう。

研修G 指導・講評－1

「学習指導案の作り方について」

江戸川区教育委員会学校教育支援センター

坂口 幸恵 先生

道徳科の学習指導案とは

教師が年間指導計画に位置付けられた主題を指導するに当たって、生徒や学級の実態に即して、教師自身の創意工夫を生かして作成する具体的な指導計画案のこと。

中学校学習指導要領解説 第4章 第2節2(1)P78

ア 道徳科の学習指導案の内容

(ア) 主題名

(イ) ねらいと教材

(ウ) 主題設定の理由

(エ) 学習指導過程

(オ) その他

他の教育活動との関連、評価の観点、教材分析、板書計画

※道徳教育推進教師には、自校の道徳科の授業の基本スタイルを確立していく推進役を担うことが求められる。

イ 学習指導案作成の主な手順

(ア) ねらいを検討する

(イ) 指導の重点を明確にする

(ウ) 教材を吟味する

(エ) 学習指導過程を構想する

※本研修会参加の道德教育推進教師の主題設定は「国際理解、国際貢献」11名、

「思いやり、感謝」9名、「公正、公平」2名、「生命の尊さ、よりよく生きる喜び」1名。「私たちの道德」に掲載されているからといって同じ主題名でなければならないということはない。生徒の実態に応じて、別の主題名で扱うことも十分考えられる。(年間指導計画に基づき、意図的・計画的に修正する。)

※本研修の教材は中学校教科書7社中5社、小学校教科書8社中3社で掲載。

道德科に生かす指導方法の工夫

中学校学習指導要領解説 第4章 第2節3(4)P83

(ア)教材を掲示する工夫

(イ)発問の工夫

※「中心発問」の設定が授業構想のカギ。
学習指導案中に明記するとよい。

(ウ)話し合いの工夫

※本研修ではペア、グループ等を10名が明記

(エ)書く活動の工夫

※本研修では道德ノート、ワークシート、タブレット、ポートフォリオ等を9名が明記

(オ)動作化、役割演技などの表現活動の工夫

※本研修ではロールプレインを1名が明記

(カ)板書を生かす工夫

(キ)説話の工夫

多様な学習指導—問題解決的な学習の工夫

発問の仕方の工夫が重要である。飯塚秀彦先生の挙げられた7つの「教師の主な発問例(前掲)」中、本研修では、4つについて創意工夫ある指導案を展開していた。

道德科における主体的・対話的で深い学びとは、道德的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多

面的・多角的に考え、自己の人間としての生き方について考えを深める学習

①問題意識をもつ

②自己との関わりで考える

③多面的・多角的に考える

④自らを振り返る

⑤自己の人間としての生き方についての考えを深める

①について

教材を理解させることに終始せず、教材を活用して生き方について問題意識をもつことが大切

②について

ある事柄を自分のものあるいは自分に関係があるものとして考えることが大切

③について

生徒同士、教師やゲストティーチャー、先人の考えとの対話を通して、協働的に学びを広め深めていくことが大切

④⑤について

道德的価値に関わる事象を自分自身の問題として受けとめられるようにすること、自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにすること、これからの生き方の課題を考え、自己の生き方として実現していこうとする思いや願いを深めることができるようにすることが必要。

令和の日本型学校教育(2021年1月26日中央教育審議会答申)では、個別最適な学びと協働的な学びの実現を強調している。道德科においてもこれを意識して授業構想を立てることが必要である。

道德科における主体的・対話的で深い学びとは、自分の考えを表現し、共に語り合い、自己の生き方について考えを深めていくことと置き換えることができる。

「考え、議論する道德」という道德の教科化に伴うキャッチフレーズも、主体的に自分との関わりで考え、多様な感じ方、考え

方と出会い交流することを通して、自分の考えをより明確にする学習と捉えられる。

一時間の道徳科の授業の流れを5つの展開で考えることもできる。

- ①自分の気持ちや考えを自分の中で確かめる。＜人間理解＞
- ②自分の気持ちや考えを相手に伝える。
- ③友達の気持ちや考えを聞いて自分と比べる。＜他者理解＞
- ④自分の中でも一つではなく、たくさん考える。
- ⑤いろいろな気持ちや考えの中から、よいと思うものを考える。＜価値理解＞

学習指導案を作成する際は、指導と評価の一体化を図ることが大切である。道徳授業で「道徳的諸価値の理解を基に」「物事を多面的・多角的に考え」「自己の生き方についての考えを深める」という学習活動を、「育成すべき資質、能力の三つの柱」に対応させて授業構想を立て、指導と評価の一体化を図ること。

研修G 指導・講評－2

「グループ発表総括」

麗澤大学特任教授 鈴木 明雄 先生

これから我々教育者が目指す道徳教育・道徳科には、どのような内容・方法が求められるのか。

道徳科は、育成すべき資質・能力の三つの柱の一つである「学びに向かう力、人間性等」に関連して全教科等の先取的指導理念を担っている。

世界の主な教育改革の理念の動向は経験・実存主義に基づくものが主流であるが、日本では本質・価値・系統主義を重んじ、汎用的能力の育成を重視する世界的な潮流を踏まえつつ知識・技能、思考力・判断力・表現力等バランスある教育課程を重

視している。

道徳科の内容は方向目標（向上目標）であり、他の教科、活動のように評価基準が設定されていない。道徳科の評価は、学習状況及び道徳性に係る成長の様子に限定される。学習状況は教科等と同じ観点で評価し、道徳性に係る成長の様子は、顕著な事例を事実として把握し、肯定評価観に立って勇気付けることが重要である。

○地球環境問題の登場

これまで、日本で環境問題と言えば公害問題（イタイイタイ病、水俣病、新潟水俣病、四日市ぜんそく）であったが、現在は地球全体の問題となっている。SDGsは道徳的価値と実践、グローバルな思考・実践、ICT活用といった点からも学校教育・レジリエンスの学習に有効である。

○DX教育（デジタル・トランスフォーメーション教育）

DX教育とは、教育を行う場面におけるデータとデジタル技術を活用し教育手法の変革を行うとともにデジタルを活用した教育を行うこと。

児童・生徒が、主体的に、情報リテラシーや情報モラルを、生涯身に付け学んでいく情報化社会の到来をイメージしている。これまでの「学校で」教える、「教員が」教える、「同時に」教える、「同一学年の児童生徒に」「同じ速度で」「同じ内容を」教える社会から、「どこからでも」学べる、「誰とでも」学べる、「いつでも」学べる、「自分らしく」学べる社会を目指して行われる教育である。

一人1台のタブレットは、児童生徒の粘り強い探究心を育み、主体的・対話的で深い学びができる人間の育成につながる。

○改訂した「道徳教育アーカイブ」（文部科学省）も参考になる。